

山口が勢いよく事務所に入ると、足を止めた。事務所内には秋野が言っていたとおり、男達三人の姿が目に入った。そして、小久保の手に握られている短剣も確認できた。

鈴木も山口に続き事務所に入った。鈴木は事務所内の光景を目にして思わず声を出した。「えっ！ なに！」

「説明してください」山口がゆっくりと、落ち着いた口調で小久保に話しかけた。それは自分自身が冷静さを失わないためでもあった。「何をするつもりなんですか」

「行動を起こす時期がきたのさ」小久保が言った。「俺達の境遇を訴え、改善を要求する」「我慢の限界ってわけだ」織田が言った。

「それで事務所を占拠。なぜですか、今は皆さんの意見を自ら発言できる場を設けるために私が動いているじゃないですか。小久保さん、生活の改善は私に任せたはずじゃなかったのですか」

「あの時はな。しかし仲間が犠牲となったことで状況が大きく変わった。この施設は金のために俺達を虫けらのように扱っていることが明白となった今、そんな奴らとの話し合いは無意味だ」

「それにな」佐々木が言った。「仲間が犠牲になって、なにもせずただ黙っている俺達じゃないんでね。目には目を歯には歯を。とことんやってやるまでだ」

山口は秋野に顔を向けると、事務長と施設長はこのことを知っているのか尋ねた。

秋野はうなずいた。

「俺達が追い出したのさ」織田が言った。「それにな、事務長は職員を見捨て一目散に逃げ出しやがった。出ていった時のあいつの顔、あんたに見せたかったよ。今にも泣きそうな顔だよ」

「多分」秋野が言った。「警察に通報したかと……」

山口は手詰まりを感じた。もう俺にできることはないのか……。

「山口君」小久保が言った。「もう事は進んでいる。今更俺達を止めることはできない。じきに警察が来るだろう」

「警察がくれば大ごとになる」山口は小久保の意図を理解した。「安田講堂だ」山口はそう呟いたあと小久保に言った。「施設の法人に訴えるわけではなく社会に訴えることが目的ですね。小久保さん、何か別な方法があるはずですよ。社会に対して訴えようとするその気持ちは分ります。しかしこの方法では皆さん検挙されるかもしれませんよ。こんな無鉄砲な――」

「おい若造」佐々木が強い口調で言った。「俺達に説教か。いいかよく聞け、世間はな施設の中のことなんか無関心なんだよ。施設に入れられ俺達が虐げられている口惜しさを誰も分かつちやいないし知ろうともしない。だったらこっちが教えてやるまでだ」

「全ての人が無関心とは、それに虐げられているなんて――」

「じゃあお前」佐々木は山口の言葉を遮った。「この近所の住民に聞いてみろ」佐々木は力強く山口を指した。「この施設にどのような人が入り、一日何をしているのか、どのように過ごしているのか聞いてみろ。正確に答えられる奴がいると思うか。どうなんだ！」

山口は返す言葉がなかった。

「関心なしなんだよ。だがな、世間っていうものはな、事件が起きると興味を持ち始める。東大安田講堂事件、浅間山荘事件、成田闘争。興味を持つ理由は様々だろうが、世間はテレビに釘付けなる。だからこれが一番の近道だ。俺達が火をつければ、後はマスコミが動き、色々と報道する。そして世間は事実を知るわけだ。俺達が隔離されて生き続けているのをな。お前だって本当はうすうす気づいているだろ。俺達に自由がないことを」

「隔離だなんて」山口は弱々しく言った。「そんな」

「そうだ、隔離だよ。規則に縛られ自由がなく、好きに外にも出られない。毎日決められたスケジュールの中で生き続けている環境を隔離と言わないんだったら何て言う」佐々木はしばらく山口を見続けたあとに言った。「そうだな、こんなのはどうか」そう言うとゆっくりと挑発するように言葉を発した。「藤田は殺されたようなのもだ。このままだと新たな犠牲者がでることだろうよ。まるでここはナチス・ドイツがおこなったユダヤ人大量虐殺、ホロコーストだ」

「ホロコースト？」山口はその意味を理解できなかったが話の流れからその比喩が施設に対する挑戦的なものだと感じ取った。

佐々木は山口の微々たる反応を見て鼻で笑った。「なんだ、知らんのか。まあいい」

「山口君」小久保が言った。「目線が違うんだよ。俺達を目線で考えてくれ。君達が怠けているとは決して言っていない。それなりに頑張っているだろう。しかしな、君達が良かれと思う介護は君達だけで考えたものだ。そこに俺達はいない。教えてくれ、なぜ俺達に聞かないんだ。前も言ったよな。会話だよ。会話が必要なんだ」

小久保さんの言うことは理解できる。山口は思った。しかし、このままだとおそらく警察に逮捕されるだろう。その先この三人はどうなるんだ。「どうしたらいいんだ」山口は呟いた。

「風を感じなさい」

その声は山口の背後から聞こえてきた。聞き覚えのある声だった。山口は声が聞こえたほうに振り向いた。そこには小早川と古賀がいた。

山口は二人を見ながら言った。「なんでここに」

小早川は静かに話し始めた。「目の前に見えている事だけに捉われると、ただの騒ぎ事で終わってしまいます。でも三人は単に騒ぎたいからここに来たわけじゃないのは分りますよね。彼らは利用者の切実な問題を世間に対して投げかけにきたんです。確かに方法としては穏やかではありません。山口さん、あなたが今ここにいる意義をよく考えてください。この騒ぎをいかに穏便に終わらせようかと考えているのなら、その考えは捨てなさい。この勇敢な三人の男達の信念ある行動を無駄に終わらせないために何をすべきか」小早川そう言うとうち口を閉ざして山口を見つめた。

確かにそうだ。山口は思った。今の俺はこの騒ぎをこれ以上波風が立たないように、三人のためにどうしたら穏便に済ますことができるのかを考えることしか頭になかった。「そうじゃない、いかに進めるかだ」

「男達は退路を断つ覚悟よ。さあ、どうします。事は動き始めています。今度はこの流れをどう生かすか、それがあなたの役割。彼らの言葉をいかに風に乗せるか」

山口は居酒屋での田村と高橋の言葉を思い返した。自分の直感を信じなさい……。山口は小さく何度もうなずいたあとに言った。「やってやろうじゃないか」山口は小久保に顔を向けた。「小久保さん、我々介護福祉士は利用者のニーズを受け止め、代弁する役割を課されています。私は代弁者としてここに残ります」

小久保は眉間にしわを寄せた。「お前、何を言っているのか分かっているのか」

山口はうなずいた。

「馬鹿なことを言うな。いずれ警察が来る。俺達と一緒にいたら逮捕されるかもしれないんだぞ」小久保は皆を見渡した。「前科者になるんだ。それでもいいのか。さっ、分かっただろ、ここから出て行くんだ」

「これは私達、介護従事者の闘いでもあるかもしれません」

「何を――」

山口は小久保の話を遮った。「日本介護福祉士会の倫理基準ではこう述べています。社会にみられる不正義の改善と利用者の問題解決のために、効果的な方法により社会に働きかけなければならない。と」

「これはかなり効果的だぜ」佐々木が言った。

小久保は山口をしばらく見つめた後に言った。「こんな体でなきゃ、お前の襟元を掴んで、ここから放り出すんだけどな」小久保はため息をついた。「本当にいいんだな」

「ただ、私一人が残れば十分かと思います」山口は秋野の顔を見た。

秋野が言った。「ここまできたら、最後まで見届けたくまりました。いえ、見届けるだけではなく、皆さんの思いが届くためなら、お手伝いします」

山口は長谷川を見た。長谷川はうなずいた。

長谷川の隣にいた松下もうなずいた。「皆さんが残るといふのなら……」

「小早川さん」山口は彼女の返事が想像できたが、本人の口から聞いたかった。

「私は自分の意思でここに来ました。決めるのは私です」

山口はゆっくりうなずいた。山口は古賀を見つめ、彼女の返事を待った。

「介護長、あなたは私のボスです。ボスが留まるのなら、私も留まります。それに小早川さんの付き添いですから」そう言うと、古賀は小早川に顔を向けた。「いつも一緒だもんねえ」

小早川も笑顔を返した。「ねえ」

山口の表情が一瞬緩んだが、直ぐに真顔に戻り鈴木に顔を向けた。「鈴木、どうする」

「私もあなたの部下です。上司をおいて出て行くわけにはいきません」

「山口さん」小早川が言った。「あなたが醸し出す人となりのおかげでここにいる職員さん達があなたに全幅の信頼を寄せています。それはここにいるお二人の職員だけでなく、これから増えていくでしょう」

織田が呆れた表情を見せた。「やれやれ、もう誰も来ないだろうな。なあ小久保さんよ、次からは追い返してくれよ。これ以上増えたら俺達三人の存在が薄くなっちまう」

その時、サイレンの音が聞こえ始めた。佐々木が窓に近づき、外の様子を伺い始めた。サイレンの音が大きくなると来客用の駐車場に次々とパトカーが止まり始めた。赤色灯の光が周囲の建物に反射している。「パトカーが四台と覆面が一台見える。赤色灯がミラーボールのように光ってるぜ」

山口はPHSを手にとると、それを見ていた小久保が言った。

「おい、誰に電話をかけるつもりだ」

「二階にいる佐藤主任です。今起きている状況を現場に説明して動揺しないよう伝えま

二階のステーションの電話が鳴った時、そこにいたのは佐藤一人だった。他の職員は食堂に集まり、食堂から見える駐車場にいる警察車両のことで話が持ち切りの状態だった。

佐藤は受話器を取った。佐藤は電話の相手に自分の名前を言った。

「山口だ」山口は佐藤に事務所で起きていることを伝えた。

佐藤は眉間にしわが寄り、当惑した表情になった。「どうして……」

「あるべき姿だよ。彼等は自分達の当たり前の生活、あるべき姿を取り戻したために動いたんだ。施設での生活が今までの生活といかに乖離しているかを訴えるために」

「あるべき姿……」

「彼等のやり方は間違いなのは分かっている。しかし、ここまでしなければ誰も彼らの訴えに耳を貸さなかった」

「介護長」佐藤は何とか苛立つ感情を抑えながら言った。「なに冷静に言っているんですか。三人はとんでもない事をしているんですよ。分かりますよね。このままだと逮捕されますよ。介護長、事務所にいるのなら、早く彼らを説得してやめさせてください」

「三人がここまでの決意に至った原因の中に俺も含まれている。三人の、いや、利用者が発する意見を聞いてはいたが、でも彼らが切に望む意見に対して我々はアクションを起こしていなかった。我々の日々の関わり方が彼ら三人にこのような行動を招いたのかもしれない」

「今はこの状況を解決させることを考えるのが最優先じゃないですか」

「最優先なのは彼らが心底望むことを実現させることだよ」

「介護長、冷静に考えてください。いくらなんでもこれはやり過ぎだと思います。確かにあなたが言うように利用者が望むことを実現させることは――」

「佐藤主任」山口は佐藤の話を遮った。「俺は冷静だよ。だからこそ俺は彼らの思いを受け止め、自分が何をすべきかがはっきりと分かる。今の彼らは逮捕されるのを承知のうで行動しているんだ。自分を犠牲にするほどの覚悟を持って、施設で暮らす利用者の待遇を変えようとしている。その堅固な決心に正面から応えず、何事もなかったように事態を終わらせるのか。この状況で彼らを目の前にして事なかれ主義的に対応することはできない。佐藤主任、賽は投げられたんだ。今、俺も彼らと同じフィールドに立ち、同様の覚悟を持って彼らを支えなければならない。介護職は常に利用者のそばに立ち、彼らを苦しめるものから守り、そして解決させることが役割だ」

二人のあいだに沈黙が流れた。

「それって」佐藤が静かに言った。「利用者ニーズの代弁、ですか」佐藤は日本介護福祉士会が宣言した倫理綱領の一文を思い出した。介護福祉士は利用者の真のニーズを受け止め、それを代弁していくことも重要な役割である。「介護長は今がその時と……」

「介護職員は日々全力で介護に取り組み、自分がやるべき役割を意識し、自負を持って介護業務を全うしている。しかし、その力を発揮している観点がどうやら施設目線、業務優先の感があり、利用者が思うベクトルとズレが生じている。施設職員として業務の遂行を考えることは大事だが、業務中心を軸とした介護は本来利用者が求めている日常生活を提供しているとは言い難い。そしてそれは介護を実践するにあたり専門性を無視した介護に陥ってしまっているように感じられる。今こそ利益だけに囚われているレールから利用者目線による介護サービスの提供を軸として、そこからいかに施設経営を継続するかを考えるための方向転換のチャンスだ」

「両輪の轍」佐藤がつぶやいた。

「私を含め、君達リーダーが声を上げる時がきた。一人の介護福祉士、介護と福祉の専門職の目でこの危機を見れば、今の自分が何を感じ、何をすべきかが自ずと見えてくる。今こそ一歩前に足を踏み出すべきじゃないかな。介護のプライドを持ってね」山口は佐藤との話を締めくくるため一旦口を閉ざした。「さて、そろそろ準備をしないと。主任、これが終わるまで一階には降りずにフロアに留まるよう皆に伝えてくれ。これはお願いではない。介護長としての指示だ。それに指示を出した以上、全責任は俺が持つ。そして利用者達が不安にならないよう配慮してくれ」

山口が電話を切ると、佐藤はゆっくりと受話器を戻した。「介護福祉士としての自分……」そう言うと食堂に集まっている利用者と職員に目を向けた。「唯一の支えは私達……私がここにいる意義……介護プライド……」

「介護プライドか」小久保は彼の口から出た介護プライドの言葉を聞き、口元に笑みを浮かべながら思った。熱く語った彼のためにも最後までやりつくさないとな。小久保の顔から笑みが消え、顔を鈴木に向けた。「おい鈴木君、全てのブラインドカーテンを下ろしてくれ」

鈴木はうなずくと窓に行き、ブラインドカーテンを下ろし始めた。

山口がPHSをポケットに戻すと小久保に言った。「予定どおり、ですか」

「ああ、順調だ。次は外に通じる全ての出入り口に鍵を掛けてくれ」

「分かりました」

佐々木が言った。「さて、第二章の始まりだ」